

夏の友達

一 山深い村

もう、三十年以上前になる。父の仕事の関係で、私はS県の山中の村に一年ほど住んだことがある。父は道路のトンネル工事に関係していた。現場に近いK村の役場に派遣されてきたS県の公務員だった。幼かった私は父の仕事の詳しいことは分からないが、工事の進み具合の報告や事務の仕事をしていたようだ。役場の机を借りるような格好で算盤をはじいていた姿を覚えている。トンネルはS県とK府を隔てる山腹を貫通し、従来からの県境の難所H峠の道を三分の一以上短縮するものだった。しかし、初めから難工事が予想され、何年かかるかめどが立たない、いつになったら県庁に戻れるか分からないというのが、一家をあげて村にやってきた理由だった。

同じ時期に、もう一組、同じ理由でK府から村にやってきた父子がいた。

所々に雪を残した山嶺が果てることなく続き、山腹に薄い霧が流れていた。霧が消えると、山の深さが際立った。バスは細い道を何度もカーブを切りながら、上り下りを繰り返し、山の深い懷に吸い込まれて行った。眼下には、様々に変化して現れる川があった。岩を削るような激しい流れ、ゆったりと青に沈む流れ、遙か下方に曲がりくねった線を引く流れ。

バスは川を遡行するように走った。一つの集落を抜けると、また、用意されていたように川が現れた。白く飛び散る無数のしぶきと水の流れが、春の田にも、茅葺き

の屋根にも、次々に姿を変える山にも、連続して映っていた。

なにもかもの背景に川の流れるように思えた。

父は一番後部の座席に荷物に埋もれるようにして目を閉じていた。

母は胸元を気にしながら保子に乳首を含ませていた。

乗客は私達だけだった。運転手は無言でバスを走らせ、時々荒々しく警笛を鳴らした。

「どこまでな？」

突然、運転手は振り向いて言った。

一瞬三人は緊張した。

「K役場です」

父が答える。

すぐに車内はバスの立てる音だけに戻った。

父は先に一度来ている。私と乳呑児のいる母は初めてだった。母は時計を何度も見ていた。父から聞いている時間を時計の針で計り、あと、何分と独り言を呟いた。三人は殆ど無言だった。初めての道は思った以上に遠く、時間が聞いていたよりも随分長く感じられた。

「もうすぐね」

父のそばの座席に移り、母は聞いた。父は無言で頷いた。

私の不安が現実的な姿を現し段々と近づいてくるように思われた。なにが不安なのかと問われても、答えようのない漠然としていたものが、もうすぐねという言葉に耳にしたとたん、川にかかる長い赤い橋や、時々バスに触れ、カサカサと音をたてる木の葉の気配や、目を閉じても見える川の流れの中に明確に立ち上がってくるように思えた。

バスがエンジンをふかす激しい音と土煙を残して視界

から消えると、急に、置き去りにされたような気持ちになった。

山の裾が川の向こう岸に急な斜面を落としている。私の位置からは一軒の家も見えない。街道はすぐに林のなかに消え、その向こうにまた、山嶺が薄い線を引いていた。

生活の音も、匂いもなかった。村が、その姿と生活の気配を消し、異分子の一挙一動を、その息遣いまでもを、じっと見つめているような気がした。

「誰か迎えに出てくれているかと思ったんやが」

父は荷物を足元に下ろし、気落した口調で言った。

「役場に勤める訳ではないんですから」

母は保子を負いながら言った。

「とにかく、都落ちなんて気持ち持たんことや。住めば都さ」

父は荷物を両手に下げ、勢いよく歩き出した。家族は下方に川を見ながら、人気のない街道の端を一列になつて続いた。

四月も半ばを過ぎているのに、頬にあたる風が冷たかった。

「空気が旨い。町と大違いや」

父は、明るく言った。

私と母はそんな父の影を追うように歩いた。

桜の木が四、五本植っていて、今が満開だった。

「町より十日は遅いな」

と、父は言った。

桜の木の向こうに古い木造の役場があった。

中に入ると、職員と居合わせた村人が一斉に三人を見た。町では次の瞬間には目を反らすのだが、彼等はじっと見たままだった。

「えらい遠いところを、ようおこし」

奥の方から赤銅色の顔をした年配の男が声をかけた。
助役の田島さんだった。

「お世話になります」

父は田島さんと挨拶を交わし、母と私を紹介した。それから、父は部屋の奥で、田島さんと長い話をした。母と私は、待合の長椅子で父の話が終わるのを待った。途中、保子がむずがったので、母は保子を抱いて外へ出た。私は人の視線を避け、下を向いていた。

「小学校五年でしたなあ、ちゃんと言うたあります」

自分のことが話題になっているらしかった

「家は空き家になって一年ちよつとやし、プロパンもいれておきましたから、すぐに住める思います。まあ、町のようなわけにはいきませんやろが」

「何から何まで世話になって」

話はそれから仕事の方に移っていった。

職員の一人が女の人の名を呼んだ。

「ジュースかなんかあったやろ。ボクに出したって」

暫くして女の人がジュースを持ってきてくれた。

「有難う、言いなさい」

奥から、父の声がした。

私はピヨコンと頭を下げた。

「礼儀知らずで」

父が恐縮した。

「いや、いや、子供さんも大変や。せやけど、すぐ馴れはりますわ。大人なんかよりずーと順応性が強いよって。うちの坊主も同じ五年生やし。それに、塩崎さんの息子さんも五年生や」

「塩崎さん？」

「京都から、あんたと同じようにきたはる人や、今日は京都に帰ったはるが、晩に挨拶に行く言うてました」

私はジュースを呑み干すと、空瓶を何処に置いていい

のか分からず、持ったまま、そっと、外に出た。

母は桜の木の下に腰を下ろしていた。

「まだ、お話終わらないの？」

保子を重そうに抱きながら母は言った。

山の端に日が落ちていく。鼠色の雲が光り、空も山も、薄い墨の粒子に少しずつ染まり始めていた。私はこんな所にいる自分が不思議だった。気持が不安定で、自分が自分でないような気がした。

「おなか、すかない？」

母が私の顔を覗き込んだ。

私は首を振った。

「もらったの？」

ジュースの瓶を見て母は言った。

「有難う言った？」

私は黙って桜の木を見上げた。

光の薄くなった空の下で、小さな白い花びらがいくつも重なってぼんやりと目に映った。

二 川の音

帰路につく役場の人の一番後から、田島さんと父が姿を見せた。

「おそうなってもて、奥さんすまんことで。寒うなかつたかいな。中で休んでもらうように何回もいうたんやが」

父の方をチラリと見て田島さんは言った。

「私が来るまで、助役さんに県の仕事をやってもらってたんや。えらい世話をかけてしもうて」

「わしは明日おらしませんね。せやなかったら引き継ぎはゆっくりでよかったんやが。疲れたはるところをえらい時間とらしてしもた。家までは歩いて、しれたあるけ

ど、荷物が多いよって、ちよっと、車を回してきますわ」

田島さんの姿が消えると、母は、父の耳もとで、そつと囁いた。

「晩ご飯、どうしましょ。あなたは鮎屋で食べる言うたはりましたけど」

「塩崎さん、京都から、わしと同じ仕事で来たはる人らしいけど、その人に助役さんが弁当を持ってくるように頼んでくれはったんや。一時間程前やから、もう、きたはるかもわからへん」

「弁当？」

「その人は鮎屋の離れに間借りしたはるらしい」

父の横に大きな自家用車が止まった。町でもあまり見かけない立派な車だった。中から顔を覗かせ、田島さんが乗るように促した。

車は、真っ暗な街道を少し走り、右にカーブを切った。

「着いた」

父が母に言った。

その時、私はヘッドライトに浮かび上がった大小の二つの影を見た。

大きな影は、田島さんにお辞儀をし、小さな影は明らかに背を向けていた。

「塩崎はん、さくを開けてくれはりますか」

田島さんが窓から首を出して大声で言った。

大きな影は少しまごつきながら、背の低いさくを押しはじめた。田島さんはエンジンをふかし、車を取り入れた。

「今日は闇夜やなあ、ちよっと、車を回すわ」

田島さんがハンドルを左右に大きく動かし、車を反転させると、目の高さに、ぼんやりと屋根が見えた。

「くろうて、あぶない、あんた、家の電気つけてきて」

田島さんが父に言った。

「はい」と、父は返事をして車から降り、ライトに照らされた道を歩きだした。家への道は下り、父の背中が沈むように消えて暫くすると、提灯に火が入ったように明かりが点き、古い農家の屋根が照らし出され、こぼれた明かりが、背景の木々を墨絵のように浮かび上がらせた。そして、それまで気づかなかった川の音が聞こえ始めた。

三 白い少年

「こちらから、挨拶に伺わななりませんのに」

荷物を取りに車に戻った父は、塩崎さんに丁寧にお辞儀をした。

いつの間にか小さな影は私の視界から消えていた。

「暗いよって気いつけや」

一歩一歩を確かめるように坂を下る私の背後から、父が何度も声をかけた。

重い引戸を開け、高い敷居を越えると、土間を隔てて左に幅二尺程の框があり、一段上がって奥が座敷になっていた。

二間続きの奥の部屋に保子を寝かせると母は、

「お茶いれます」

と、田島さんの顔を伺った。

「ああ、台所は土間の奥にあるんや。使こうてへん古い竈があったりして、使い勝手が悪いやろけど、辛抱してや。プロパンの説明もせなあかんし」

田島さんが立ちあがり、母は後ろに続いた

「来はんの、こころまちにしてましてん」

塩崎さんが言った。

「私達も心丈夫です。なんやかやと教えてもらわないかんし」

「いや、わしらもまだ、二週間経ったところですし、お

互いよそののやし、なかようさしてもらおとおもてますね」

塩崎さんは弁当の包みをといた。

「鮎屋いうて、道路の向こうの旅館の離れに間借りしますね。そこで、作ってもらいましてん。田舎料理で口にあわしまへんやろけど」

「いや、いや、助かりました。こんな遅うなると思いうてしませんでしたので。なんの用意もしてへんので、どうしよう思うてたところで」

塩崎さんは小柄な大人しい感じの人で、父より、少し若く見えた。相手の顔を見ずにうつむきかげんでボソボソと喋った。

田島さんが座敷に上がってきて、母がお茶を運んできた。

「あなた、田島さんの奥さんに、きれいに掃除してもらったそうで」

「ほんとに、すみませんでした。おかげで、今夜から、家族みんな気持よう寝やしてもらえます。正則もおじさんにお礼言い」

私と母は父に合わせて頭を下げた。

「そんな礼言われる程のこととしてへん」

田島さんは顔の前で手を振り、大きく笑った。

「ほんなら、わしらは引きあげよか」

田島さんが塩崎さんを見て言った。

「もっとゆっくりして下さい」

母が言った。

「今日は疲れたはるやろから、帰りますわ。そのうち、いやちゆうほどお邪魔しますよって」

田島さんは塩崎さんを促して立ち上がった

その時私の目の隅で小さな影が動いた。

そして、その影は大人達の背後に音もなく隠れた。

塩崎さんだけが、その気配に気づいた。

「道夫、挨拶しよし」

塩崎さんが体を斜めにすると、土間に少年が立っていた。私と同学年とは思えない程小さな少年だった。それよりも家族が一瞬声を失ったのは、少年の透き通るような顔の白さだった。

「ここのぼっちゃんとおない年や、仲ようしてもらいや」

塩崎さんは、また彼の陰に隠れた少年に言った。

私と道夫との最初の出会いだった。

四 古い柱時計

他人がいなくなると、家族は一つ明かりの下に頭を寄せて暫くぼんやりとしていた。今日初めて何もしない時間を持った。そして、それぞれが家の様子を落ち着いて見ることが出来た。

家は単純な構造をしていた。二間の部屋の両側に廊下がついていて、右側は二部屋に続き、左側は奥の部屋だけについていた。左側の廊下の奥に便所と、風呂があった。両方とも廊下を隔てて雨戸が閉まっている。

「晩に着いたら、周りの様子がなにもわからんなあ」

父はそう言って、弁当に手を伸ばした。母が冷めた茶を三つの碗に注いだ。急に私は激しい空腹を感じた。

「あの時計動くんかいな？」

箸を止めて、父は上目遣いに廊下と部屋を隔てている鴨居の上を見た。私と母は気づかずにいたが、古い柱時計が掛かっていた。

父は、私の小さな文机にのり、ネジを巻き、時間を合わせた。長針を一回転さす度に、空気を震わせ、時計は、ポーン、ポーンと鳴った。

「動くやないか。鳴る数もこれで合うたし」

父は、手をはたきながら、机から降りた。
振子が、物音の絶えていた居間で時を刻み始めた。

川の音が耳について、なかなか寝つけなかった。川はどこを流れているのだろうか？ その音が気味が悪く、私は心細くなった。すでに、父母は寝息をたてている。闇の中に目を凝らし、早く夜が明ければいいのにと、繰り返した。

雨戸を開ける音と同時に差し込む陽光に目が醒めた。

廊下の向こうに狭い庭がある。その端から急な斜面が、石を敷き詰めたような河原に落ちていた。斜面には、細い背の低い雑木が無秩序に根を張り、雑草が土を隠していた。川は中洲で分断され、二つの流れになっている。釣り人が一人、中洲を移動している。中洲が背の高い草に覆われているのは、彼が時々草のなかに見え隠れするので分かった。川向こうは山だ。

「杉山や」

父が、タオルを手渡しながら私に言った。竹の筒から落ちてくる湧き水で顔を洗っていた私は濡れた顔を挙げた。

「ほら、あそこに切り出した杉が並べてある。あの山には熊がでると、田島さんが言っていた」

山腹を透きとおるような薄い雲が走る。私は、杉の苗木の間に、熊が動かないかと目を凝らした。

「正則、川に降りるときはこの斜面はあかんで。坂が急やし、あぶない。街道に出れば降りる道がある。それと、川に降りる時は長靴を履くのを忘れんようにな。蝮がおるらしい。村でも毎年二、三人は咬まれるいうことや」

朝日の中で動いていると徐々に自分の居る場所が分か

ってくる。車が着いた場所は、荒れた畑地で、家はそこから石を並べた坂を下り、川に向って建っていた。裏には小高い盛り土があり、雑多な灌木が植わっていた。花をつける木が多いらしい。白い小さな花が、銅貨ほどの大きさに固まり、点々と咲いていたり、堅い蕾をつけた木もあった。

「飯は竈でたいたんか？」

「まさか、使いもんになりませんよ。それに、使えたとしても、私には無理です」

「米が旨いのか、ご飯がおいしい」

「お米は家から持ってきたのを使いました」

「それなら、空気が旨いからだ」

日ごろ食の細い父がご飯のおかわりをした。

缶詰を開けての朝食だが、確かに父の言うようにご飯がおいしかった。

「それより、お台所が低くって、腰が痛うて」

「まあ、徐々に改良していけばいいさ」

「人様の家ですから、それも」

父は少し言葉に詰まってから、

「それじゃ、田島さんに断ってからするようにしよ」と、言った。

「正則は二、三日、お母さんを手伝うてやってくれ。荷物の整理や、買い物なんかでたいへんやろから。来週から学校に行くようにしたらええ」

「あなた、今日から、仕事ですか？」

「初めが大事や。落ち着いたら、休んで家のことするようにするから、大きな仕事は残しといて」

そして、茶を啜りながら、

「どっちみち、ずーとこの村に住むわけやないし、一日、一日を上手に過ごしたらええんや」

と、言った。

「午前中だけでも駄目ですか？」

母が訴えるように言った。

父は黙って腕時計に目を落とした。そして、宙に目を
さ迷わせ、役場までの時間を計算した。

父は立ち上がり、ネクタイを締めた。

柵の所まで見送りに出た母は、街道を曲がり、父の姿
が消えると、私に話すというふうでもなく、呟いた。

「小役人や」

母が父を非難したのを、この時以外に私は聞いたこと
がない。その時、何故か私は父と母を哀れに思った。

今でも、家族を掌に乗せているように感じる時、掌の
持ち主である自分にも、乗っている家族にも、自分が父
であることが良かったのかと思う時、その時の光景がし
ばしば重なる。

五 葵

暫く、母と私は柵の前でぼんやりとしていた。途方に
暮れていたといってもよかった。

町では、家を一步でると生活の匂いがあった。しかし、
ここにはない。あるのは二人に覆いかぶさってくるよう
な自然だけだった。

田島さんの奥さんがやってきた。大柄なよく肥った、
気さくな人だった。

母と直ぐに打ち解けて、なんのかのと手伝いをしてく
れた。筆筭に服を入れながら、二人は大笑いしたりした。
私は、その光景をみながら、父のかわりにほっとした。
私は自分の小さな文机に、教科書や遊び道具を片付け
た。それが、終わると、風呂場の水洗いをした。五右衛

門風呂で、奥さんが、丸い板を沈めて入るのだと教えてくれた。

「薪はな、暫くはうちのをつこたらええ。あとは、ぼくの仕事やで。河原でひろてもええし、こなへんの木を切って乾かしてもええ」

「ほな、これ終わったら、捜す」

「落ち葉もひろときや。火種にいるけん」

「お茶入りましたから、奥さんどうぞ」

居間から母の、弾んだ声がした。

「ここで、結構、結構」

と、座敷にと勧める母に言って、奥さんは廊下にとっかりと腰を下ろした。私もその脇に腰をかけ、踏石に届かない足をぶらつかせた。

「築山もえらい荒れてしもて」

お茶を啜りながら奥さんは言った。

「ぼく、ちよっと、おいで」

湯のみを置いて、奥さんは私を手招きしながら立ち上がった。

「これは木蓮や。数は少けないけど、ツボミが膨らみ始めとる。もう、ふんわりと、ええ匂いがしてる。白い花がパーと咲いたら、座敷にいても花のにおいがするわ」

「これはなんていう花？」

私は白い花を指差した。小さな花の固まりが、細い枝に点々と咲いている。

「小手鞠や。まあ、よう咲いて」

奥さんは、日にやけた手をそっと枝に添えた。枝はしなり、花は揺れた。

「これは、ナンテンの木、冬になると、赤い実をひよどりが食べにくるよ。これはくちなしやわ。ほんまに色々とう植えたある。山が嫌いな旦那なやったけど、奥さんはそうでもなかったんやなあ」

築山に沿って歩きながら話していた奥さんが、急にしやがみこみ、

「ぼく、この葉っぱ見てみ、おもしろい形してるやろ」と、築山の一番下の斜面を指差した。ハート型の薄青の葉が斜面を覆っていた。

「家紋みたいやろ。珍しいやんで、なかなかあらへん。あおいや、葵の御紋や」

私もしやがみこんだ。奇妙な形の葉っぱの上に、二人の薄い影がほのかに流れた。

昼食をとり一旦家に帰った奥さんが乳母車を押しながらやってきた。母は取り敢えず必要な日用品を便箋に書き出しているところだった。

「これなあ、蔵から出てきたんや。うちにはもうつかうもんおらへんし、よかったら使うてもらおうて」

奥さんは乳母車を座敷の母に見せた。

「おおきに、たすかります。保子も重とうなったさかい」

縁側にかけより母は言った。

奥さんは縁に腰を下ろし、母との間に便箋を置いて、なんのかのと話始めた。

私は築山の縁につくぼり、葵を見ていた。双葉の間に淡くて明るい紫色の小さな花が下向きに、両手のように開いた葉に遠慮するように咲いている。指で触れると小さく揺れた。指先に、今まで知らずにいた小さな命の息のようなものが、そっとかかるような気がした。保子が泣いた。母が座敷にかけよる気配。ふっと、抜けるような静寂に、川の音が急に聞こえだし、葵の薄い緑に清流が一筋の光のように流れるのを私は見た。

六 獅子谷^{ししだに}

「正則、ちょっと、おばさんと鮎屋まで、買い物に行く

よって、留守番しといて」

「鮎屋？」

「鮎屋は旅館もやってるし、雑貨も置いてる。夜は、土間で飲屋もしとる。なんでも屋や。それになあ、奥さん、このへんで一番の山もちなんやで」

奥さんは、私と母の顔を交互に見て言った。

「どのくらいかかる？」

「そんなにかからへん」

保子を乳母車に乗せながら、母は言った。

「熊がきたら、ようおこし言うんやで」

「奥さん、気の小さい子やから、怖がりますかな」

「ぼくも、行く」

「ほら、あんのじょうや」

奥さんと母は顔を合わせて笑った。

「ほな、ぼんも行こうか」

奥さんは、手を私の頭に置いて、言った。私は、その手から逃れて、

「やっぱり、留守番する」

と、怒ったように言った。

坂道をあがり、二人の姿が消えても、話声は、暫く聞こえていた。

縁側に腰を下ろし、踏石をむやみやたらに爪先で蹴りながら、後を追いたい気持ちをじっと押さえ、川を見ていた。

そして、僅かな物音にも怯えた。

笑われても付いて行けばよかったと、何度も後悔した。じっとしていれば、時間が経つのが遅い。

息の数だけしか進まない。腰を上げ、家のまわりを、ぶらぶらと歩き始めた。木に巻きついた蔓が蛇に見えて、息を呑んだ。突然飛びたつ山鳩の音に足を竦めた。

家の周りを一巡した時、奥さんが言っていた薪の事を

思い出した。大人に褒めてもらいたい為に、薪を拾おうと思った。小さな枝を拾い、これじゃ間にあわないと、細い雑木の枝を引っ張ったが、枝はしなるだけだった。思い直して、地面に落ちている小枝をこまめに拾い始めた。その時、頭の上の光が、ふっと変化した気がした。顔をあげると、坂の上に立っていた少年は一步あらずさりした。

「なにをしてるんや？」

私は立ち上がり、少年を見た。彼は、体の重心を絶えず後ろに引きぎみに、また、同じ事を言った。

「なにをしてるんや？」

彼は、両拳をしっかりと握って、私を見下ろしていた。

「薪を拾てんのや」

「薪？ それやったら、河原になんぼでもある」

彼は私を見据えながら、用心深い猫のように、ゆっくりと坂を降りてきた。

私を見据える彼の眼は兎のように赤く、歩く度に金色の細い髪の毛が風にそよぐように流れた。

昨夜、塩崎さんの背後にそっと隠れた白い顔は、陽光の下で、まるで別人のように見えたが、素早く、しかし、慎重に歩を進める彼の姿は、一瞬に、私の目の中に昨夜と同一の像を結んでいた。

「河原に連れたるか？」

私は、つくぼったまま目を落とし、近づいてくる道夫の所々泥で汚れた白い足と、その下でかすかに揺れる小さな黒い影を見ていた。

「うどん粉の中から生まれたんや」

顔を見上げる私に、口元に笑みを浮かべながら、表情を探るような真剣な目差と、いつでも後ろに逃げられる距離と身構えを取りながら道夫は言った。

「この斜面から降りたら、すぐや」

「あぶないよって、あそこから降りたらあかんいわれて

る」

「ほんなら、街道へ出たらええ。そんなにかからへん。俺は魚を捕まえるから、おまえは薪をひろたらええ」

街道沿いに道夫の後を歩いた。彼は、時々、立ち止まり、私を確認すると、また歩きだした。暫くその繰り返しで歩くと、彼は急に歩を止めて私を待った。

「あそこが、獅子谷ししだにの入り口や」

彼が、街道越しに指差した場所は、なんの変哲もない街道に通じる山道に思えた。道は下っているらしく、その先は見えない。

「あの道を谷川沿いに行くと、橋があるんや。その先は村の子供もよう入りよらん。ものすごい深い谷や。何人も入ったまま出てこん人があるらしいわ。せやけど、俺は何遍も行った。大きな狐も見た。おまえ、コリーて、知ってるか？」

「知ってる。でかい犬や」

私は目を輝かせた。

彼は、思い切り両手を広げた。

「その犬より大きい。この倍はあったで。そいつが岩の上で、振り返るように俺を見とったんや。金色の毛してた。動物園の狐なんかと全然ちゃう。ものすごい綺麗やった。それに、尾っぽが、ものすご太うて長いんや。こんなくらいの太さで、この位の長さや」

彼は、両手で大きな輪をつくり、また、思い切り両手を広げた。

「熊も見たか？」

私は意気込んで聞いた。

「熊か？」

彼は少し口籠った後、

「熊は、あっちの山や」

と、川の向こうを指差し、

「獅子谷にはおらへん。獅子谷は狐や狸、猿、りす、人を襲うようなんはおらへん。道にまよて、出られんようになつて、死ぬのが怖いだけや」

彼は遠くを見る目をして言った。

いつの間にか私は彼と肩を並べて歩いていた。

七 山の底

思ったより、川への道は細く、急な勾配だった。雑草を踏み、枝が顔にあたるのをよけながら、必死に道夫の後に続いた。彼もおっかなびっくりで降りているのが分かる。しかし、

「ここは滑るぞ」

とか、

「枝を掴んで降りろ」

とか、私に声をかける。少し遅れると、立ち止まり、

「ゆっくり、ゆっくり」

と、両手で自分の膝を押さえる仕草をする。

彼は、この道を降りた時の怖さを、私の姿に重ねていたのだろう。彼は、その時は一人で降りたのだと思う。

半月前の自分が、後ろから、へっぴり腰で降りてくる。

「蝮、おらんか？」

長靴を履いていないことに気づいて、私は、彼の頭の上から声をかけた。

「大丈夫じゃ、賑やかして、俺が先に歩いてる」

うっすらと上氣した顔を私に向けて、彼は怒鳴った。

道幅が少し広まり、勾配も緩やかになった。やっと、背筋を伸ばした私の目の前に川が見えた。ドドドーと川床を叩くような音の中にいて、その音が少しも気にならない。静かだ。只、水の音だけの世界に包まれている。

二人は一氣に斜面を駆け降りた。

魚を捕ると言っていた道夫は、その事を忘れたように、私と河原の流木を拾った。大きな木も河原に打ち上げられていた。枝を曲げると、簡単に折れた。

「すごいなあ、水はこんな大きな木も運びよるんやなあ」

道夫が言った。

「生えてる木はなかなか折れんが、太うてもこれは簡単に折れる」

と、私が言うと、

「死んどるからや」

と、彼は言った。

次々に小魚が水面で跳ねた。一瞬の飛翔に、小さなしぶきがたった。

水辺に走り、腹這いになって水を飲んだ。

「水がこんなに旨いなんて、ここに来るまで、知らんだ」

光る水滴を口の周りにつけて、川の音に負けないぐらいに道夫は叫んだ。

大きな岩に腰を掛けて、二人は空を見上げた。鳶がゆつくりと旋回している。目の届く限り、山と空だけだった。

「山の底にいるような気がするなあ」

道夫が言った。

山の底。私もそんな気がした。

ぼんやりと、目をさ迷わせていると、意識が透明になり、水の流れや、山や、空に、すーと溶けていく。

「こんな話、おもしろいか？」

「どんな話？」

「ここに俺が坐っているのに、誰にも見えへんいう話や。誰かが来て、腰掛けようとしても、なんか尻がこそばい

気がして坐るのんやめる。せやけど、ある時、きれいな女の人がくるんや」

そう言つて、道夫は、照れ臭そうに足元の石を蹴った。「その時、小さい鳥が俺の肩にとまるんや。鳥は空中にとまってるように見える。羽ばたきせんと、浮かんでる。女の人は、びっくりして、そこに、誰かいるの？　って、聞かはる……」

道夫の透き通った声が途切れた。

「それで？」

待ちかねて、私は言った。

「それだけや、薪も集まったし、帰るか」

道夫は立ち上がった。

「薪を持ってよう上がらんわ」

「大丈夫や、滑らんように、一足ずつゆっくり上がった
らええ」

彼が言ったように上がるのはたいした事ではなかった。
人が踏みしめた所が分かる。

「振り返ったらあかんで、怖い思うよって
後ろから道夫が言った。

「魚釣るときは、竿とびくを両手に持って、水こぼさん
ように上がるんやし」

「蝮おらんか？」

と言いかけて、言葉をのんだ。彼が後ろから私を、見
守ってくれているのが分かっていたからだ。

「今日は学校はないんか？」

表の縁に並んで腰をかけ、私は尋ねた。

「腹が痛んだから、休んだ」

道夫はそっけなく答えた。

「学校はどんなんや？」

「田舎もんばかりでおもしろくない。それにこの村のがき
等どもはみんな、根性悪や。おまえ明日から行くん

か？」

「来週からや」

「街道沿いに行くと、遠道になるからいうて、山の中を通って行くんや。初めの頃は、直ぐに走ったり、隠れたりして、意地悪しよった。今は、俺の姿が見えたら、一、二の三で、先に山の中へ走り出しよる。いやな奴ばっかりや」

道夫は遠くの山に目をやりながら、吐き捨てた。

山嶺に日があたり、明暗が帯状に長く伸びている。しかし、太陽の在処は分からない。

「ほな、俺、帰るわ」

道夫は立ち上がった。

私も、腰をあげようとした時、母と奥さんの声が遠くで聞こえた。

「月曜日、さそいにきたる」

道夫は早口に言うのと、あっという間に、私の前から消えた。

八 家族

父が帰ってきた。

上がり框に腰を下ろし、ゆっくりと靴を脱ぎながら、「暗いなあ」

と、言った。

土間には小さな裸電球が一つぶら下がっている。二つの部屋の電球も小さく、ぼんやりとしていた。

畳に赤味がかかり、人の影が、様々な形や濃淡をつくって流れた。

「蛍光灯にかえましょか？」

母が言った。

「いいや、この家に蛍光灯はかえって妙や。百ワットに

して、傘つけたほうがええ」

私は、父と母の影を見ていた。上着を脱ぐ父と、それを受け取る母の影が二人の輪郭を二重に映して、すーと畳の上に流れるかと思うと、ハンガーに服を吊るす母と卓袱台に向かう父の影が、押し入れの襖に急に立ち上がり、やがて、それ等は小さく蹲り、畳の影は、人を乗せる盆のようにそれぞれの膝もとに収束した。

「テレビがいるな」

父は煙草に火をつけながら言った。

「共同アンテナまで線をひかな映らんらしいです」

「だれが言うてた？」

「田島さんの奥さんです。費用が結構かかるって」

「わしらに金がない思うて、そんな言い方するんちがうか？」

「そんなことありません。奥さんはええ人ですよ。今日も一日なんやかやと手伝うてくれはったし」

二つの影は動かない。

家族が小さな影になっているのが面白かった。影が動き、喋るのを見ていると、生きていることが何故か嘘のように思えてくる。同時に、町での生活が遠い昔のことのような気がした。

家族が黙ると、カチカチと柱時計の音が、過ぎ去って行く時を刻む。

なにもかもが大きな嘘なのかもしれないと、私はぼんやりと思った。

「テレビはがまんするか」

父は灰皿に煙草を、にじりつけながら私を見た。

「正則、風呂はいるぞ。一緒に入るんやったら、はよう用意せんか」

「こうやって、板を浮かして、ゆっくりと、足で沈める

んや」

風呂釜のへりに尻を乗せて、バランスをとりながら足を沈めていった。

「なかなか、うまいやないか」

父が体を擦りながら言った。

「田島のおばさんに教えてもらたんや」

私は得意になって、言った。

眼鏡を外した父の目が、優しくそうに笑っている。

「焚きましょか？」

外で母の声がした。

「そうしてもらおか。水がすけないよって。正則、水を少しずついれや。それに、えらい湯気や、窓をちよっと開けて」

小さな窓を、背伸びして少し開けた。

小さな空に、澄んだ光を放つ星がいくつも数えられた。

「やっぱり、正則の捨てきた薪は湿ってて、よう燃えんわ」

母の言葉と一緒に煙が窓に上がってきた。

「正則が？」

「川原で捨てきたさかい」

父の声に母が答える。

「川へ行ったんか？」

父が私の背中を擦りながら聞いた。

私は頷いた。

「一人で行ったんか？」

「道夫君と一緒に」

「道夫君って？」

「塩崎さんの息子さんです」

母が言った。

「おまえが行かしたんか？」

「いいえ、奥さんと、鮎屋に行ってる間に」

「そんなこととして、行き違いにでもなったら、かあさんが心配するやないか」

父が私の背中に湯をかけた。

「道夫君、よう学校を休むらしいよ。田島さんの奥さんが言うたはった。村の子によう馴染まんらしいです」

父はタオルを私に渡し、湯船に入った。

「塩崎さんの奥さんは？」

「ようしらん、せやけど、村にいてへんのは確かや。それと、一月に一回……。昨日は何曜日や？」

「木曜日です」

「木曜日に休暇とらはるらしい。子供と京都へいかはるらしい。それは出納の女の子から聞いた。昨日きて、今日や、他はなんにも分からへん」

私は泡のでないタオルで体を擦った。

「まあ、とにかく、塩崎さんはええ人みたいや。それに、ここでおうたんも、何かの巡り合わせや。親方違ても、おんなじような仕事やし、わしらとおんなじような境遇や。似たもんどうし、仲ようせなしないやろ」

「そうですけど、道夫君のことあんまりええ話聞かんのですわ」

「田島さんの奥さんが言うてるだけやろ？」

「いいや、鮎屋でも噂になってました。村の人もあんまり行かへん谷の奥に入って行くとか、嘘をようつくとか」

父は湯船につかり、目を閉じていた。母の話を聞いているようにも、聞いていないようにも見えた。

私は、そっと逃げるように風呂場を出た。得意顔で板を沈めていた時の気分が跡形もなく消えていくのが分かった。

また、川の音が聞こえはじめた。

「馴れんことはするもんやないなあ」

父は、布団の中で、煙草の煙を吹き出しながら言った。
「あっちゃ、こっちゃが痛い」

日曜日に、半日がかりで、荒れた畑地の畳二枚程を堀かえし、母が田島さんの奥さんから貰った野菜の種を植えた。胡瓜、トマト、獅子唐、葱。

昼からは田島さんと奥さんもやってきて、なんのかと賑やかに話し合い、父は、もう畳一枚程堀かえさなければならぬ羽目になった。

私は、水を運んだり、雑草を抜いたりして、父を手伝った。奥さんは、畝を作ったり、種を蒔く間隔を母に指示したり、こまめに動き回っていた。田島さんはなんのかの言いながら、突っ立ったまま喋ってばかりいた。畑仕事が終わりに、田島さん夫婦も帰ると、私の心の中に、明日への不安が、少しずつ重くなっていた。

転校への不安は計り知れないものだった。

道夫を知っているという事は安心にも、不安にもなった。

「もういいの？」

ご飯のおかわりをしない私に母は聞いた。私は黙って頷いた。学校への道中、腹が痛み、便所に行きたくなるのを恐れた。遠足等の団体行動の時、絶えず腹具合を気にしている少年だった。

雨戸は閉まっていた。しかし、外が暗いのが分かる。まだ、入り口の引き戸の僅かな隙間から光が一筋、黒い土間に長い線を伸ばしていない。

私は道夫が来ることを父母に言っていなかった。

引き戸を開ける道夫を心待ちにしながら、彼を見る父母の目を恐れた。

役場のバス停留所に集まり、山の中を歩いて学校へ行

く。行きも帰りも村の子供達と一緒にだった。

「子供も大変や。今までは、学校が家からも見える所にあつたのに」

母が言った。

「まあ、足を鍛えたらええわ。正則も丈夫になるやろ」
父が言った。

土間の光がぼんやりと伸びはじめた。

柱時計が七時を打った。

耳を澄まして、道夫のやってくる気配はなかった。

「停留所までついて行きます。保子がおるよって、学校までよう行かんし。直ぐに帰ってきます」

「時間があつたら、昼休みにでも、わしが行って、挨拶してくる」

廊下の奥で父の声がした。

「みんなと仲ようするんやで。田島さんとこの子が五年生で一番上級生やて、あんたと同じや。お母さんがおばちゃんにようたのんどいたから、大丈夫や」

街道に出ると、母は言った。

その時、

私の目の隅を、道夫が過った。

そして、道端の木の陰に一瞬にして消えた。私の足は止まらなかった。

嘘つき、のけもの、母の声が頭の中で聞こえた。彼の仲間になりたくないという気持が、ただ足元だけをみつめる目になった。彼に気づいていないのだと、自分に言っけかせた。このまま行けば、自分が村の子にいいめられても、その時は彼が助けてくれる。それからでも、彼に気づくのは遅くない。彼の好意は自分が不利な時にだけ働けばいい。

大人達の目にも、彼と仲よくするのは、よくはうつら

ないだろう。私は自分の安全と、大人たちが自分を見る目だけを考えていた。

川の音が消えた。聞こうと思っても聞こえない。

村の子供達は、好んで話かけてくるのではないが、敵意を持ったり、のけものにするという感じもなかった。

村の子供は三人で、田島さんの息子のヨツちゃんと四年生と三年生の兄妹だった。兄の修はおっとりとしていたが、妹は体は小さいが、すぐに走りだす、両頬を真っ赤にした元気な子だった。

初めて歩く道は長く感じられた。腹の具合を気にしながら、彼等に遅れないように歩いた。木洩日が光の細かい雨のように降りかかる径を、湿った落ち葉を踏みながら歩いた。

時々後ろで、カサカサと音がする。道夫がついてきているのか、小さな動物が動く音のなのか分からない。

突然、坂の上にポツカリと穴が開いたように空が見えた。

峠に立つと、急に視界が広がった。

「あれが、学校や」

ヨツちゃんが指を差す。

田圃に囲まれた、古い木造の校舎が見えた

畔道を列をなして学校に向かう子供達の姿も見える。

鮎屋の妹が坂道を転がるように走った。

山の中で後ろを見ることのなかった私は、坂を下りきると、峠を振り返った。道夫の姿はなかった。暫く目を凝らしていると、

「おい」

と、ヨツちゃんが私を呼ぶ声が聞こえてきた。

十 余所者

長い夢の途中で眼が醒めた。

暫く、天井を見つめていると、ポーン、ポーンと柱時計が十回、震えるように鳴った。

部屋の隅で眠る保子の黒い小さな頭だけが欄間から洩れる明かりで見えた。

引戸を開ける音がして、父が帰った気配がした。

「おかえりなさい」

「田舎の人はよう呑む。それに、えらいめにおうた」
居間に父が上がり、母が土間に下りたようだ。

「正則は寝たのか？」

「疲れたんでしょう、八時に寝ました」

襖を少し開ける気配に、私は眼を閉じた

「二人ともよう寝てる」

「子供なりに気疲れしたんでしょう。それに、山道を三十分も歩いたし」

「暇なかったから、学校へは行けんだ」

「明日でも、昼間に私が行ってきます。心配せんでも、仲ようしてもろてるみたいです。元気に帰ってきましたさかい」

「そうか、それはよかった。まあ、もう五年生やし、それに男の子や」

「なにか食べはりますか？」

「いや、もうええ、せんどよばれたさかい。それより、水、もう一杯もらおか」

母が、また、土間に下りた。

「えらい遅いよって、お仕事が忙しいやろ思うてましたのに、宴会ですか」

「わしと塩崎さんの歓迎会や、田島さんが音頭とってな

あ、鮎屋で」

「さっき言うたはったえらいめって？」

「塩崎さんが暴れたんや」

「暴れた？　なんで？」

「酒乱やなあれは。機嫌よう呑んでたのに、急に変な事言い出して」

「あの大人しい感じの人がですか？」

「村のもんは、わしらを差別しとるとか、Mさんは来るなり歓迎会、わしはつまみやとか。まあ、そのあたりまでは、酒の上のことやと、皆笑うてたんやけど、それから田島さんにひどう絡んで」

父は一息ついて、水を飲む気配がした。

「田島さんに、あんたの息子は、学校でうちの子を白墨いうていじめてる言い出したんや。そして、俺らになんか恨みがあるんか言うなり、膳をひっくり返しよった。後はメチャクチャや」

「信じられへんなあ、あの人が」

「じゃないから、塩崎さんを、わしが外へ連れ出したんや。すまない、すまない、言うて、今度は声あげて泣くんや。そこで、聞かんでもええ話聞いてしもうた」

暫く間をあけて、

「一本つけてくれるか、なんや、酒醒めてもうて、寒うなってきた」

と、父が言った。

「一月に一回、休暇をとるのは、息子をK大の付属病院に連れて行く為や」

「病氣？」

「滅多にない病氣らしい」

「道夫君、知っているの？」

「言うわけないやろ。皮膚が白いのをなおしてもろてる思うてる」

「なおらんの？」

「今の医学ではな。しかし、一日生きたら一日医学も進むんや、そう、言うたら、おおきに、おおきにて、また泣かれた」

また、母の土間に下りる気配がした。

「ほお、鮎か？」

「小鮎の佃煮です。鮎屋で買いましたん。安うて、おいしい言わはるさかい」

「なかなか旨い。そういうたら、この川は鮎釣りの本場や。夏になったら友釣りでもするか」

母が卓袱台を片付ける音、そして夜具をひく音。私の枕の下を流れる川の音。父の咳ばらいが一つ聞こえ、欄間から洩れる明かりが消えた。

父と母が、闇の中で動く気配がする。

「明日、早いし」

母の小さな声の語尾がかすれた。

私は、枕に耳を強く押し当て、川の音だけを聞こうと思った。

父は家で時々不機嫌になった。トンネルの現場に行つた日は、――あの様子じゃ、俺は定年まで、この村で飼殺じゃ――と、喚いた。日曜日の昼下がり、木蓮のにおいが嫌だと、根っこから抜いてしまった。村の人に、大人しい人格者だと思われている分を、家族に遠慮しながら吐き出した。

父は夕食が終わると、時々、思い出したように鮎屋に出掛けた。

一時間程経つと、私は父を迎えに行った。

いつも父は、塩崎さんと、椅子一つ間を開けて酒を呑んでいた。

私を見ると、

「よお、来たな、カアちゃんのまわしもの」と、言つて、頭をぐりぐり撫でる。

その様子に、村人は大笑いするが、塩崎さんは笑わなかった。

五月。

緑が一斉に濃くなった。淡い緑が、徐々に光を蓄え、その内部から光り始めた。

日々に山が近づいてくる。築山の葵は、小さな花を落とし、葉は緑を深め、ひとまわり大きな円になった。小さな緑も、近づいてきた。様々な緑が病葉を隠した。

風に流される細かい雨が、霧のように、山肌を霞ませたかと思うと、単調な灰色の曇天が鋭利な刃物で一筋切り裂かれ、白い光の束が、地上に向かってかけ橋を伸ばす。

僅かな雨にも川の水は濁り、激しく流れた。

母が、竹で作った、格子状の添木に胡瓜の蔓がしっかりと巻きつき始めた。私の体も心も少しずつ村に馴染んできた。

十一 螢

六月。

細い雨が毎日のように降った。梅雨に入った。

「田島さんの奥さんが、ヨッチちゃんは、今日は田植えの手伝いで休む言うてた。Ｙさんとも、兄妹そろて風邪ひいて、休みやて。おまえも、休むか？」

母が言った。

「俺は、用もないし、風邪もひいてへん」

私は言った。

峠で、道夫が後ろから声をかけた。

「今日は一人か？」

振り返って、頷くと、彼は、カタカタとランドセルの

音をたて、走り寄り、私と肩を並べた。

「なんで、村の子を嫌うんや？」

私が勇気を出して、聞くと、

「俺がきろてるんちゃう、あいつらが俺をきろとるんや」

道夫は、関心なさそうに早口で言った後、

「そんなことより、もの凄いもん見つけたんや」

と、言って、私の顔を覗きこんだ。

「何や？」

道夫は私の顔を見ながら、後ろ向きに歩いた。

「ホタル」

「ホタル？」

「ものすごいいる。草叢で光るやつ、光りながら飛ぶやつ。昼みたいに明るいんや。本当や。絶対今日も出る。一緒に行こうや」

「何処や？」

私は足を止めた。

「獅子谷や」

「橋より奥か？」

「そうや」

私はまた歩き出した。

「行ったらあかんとこや。それに晩やろ、よけいあかんとこや」

「昨日見つけたんや。この前行った時は、なんにもおらへんだのに。今まであんな綺麗なもんは見たことあらへん」

「あかんいうたら、あかんのや」

私は坂を下りながら、夜店で買ってもらった螢を思い出していた。それは、小さな籠の中で光っていた。水をやらなければ死ぬと大人に言われて、両手を水で濡らし籠にふりかけた。草の上で丸くなった水滴に、たった二匹の螢は頭を寄せていた。真っ暗な路地の隅の地面に籠

を置き、私は膝頭を抱えながら、小さな二つの明かりを見つめ、長い時間飽きることはなかった。

「何時に行くんや？」

校門の前で私は聞いた。

「七時にしよう。長靴も二つある。懐中電灯は大きいのを持ってるから、おまえは小さいのでええ。そのまま来たらええわ。谷の入り口で待ってる。嘘違う、ものすごく綺麗ねんから」

弾んだ声で道夫は、言った。そして、校舎に向かって、一気に駆け出した。

母は保子を寝かせている。

父は今夜も夕食が済むと早々に鮎屋に行った。卓袱台で、宿題をやりながら、私は何度も柱時計を見た。

「ヨツちゃんに給食持っていく」

「今ごろか？もうじきに日が暮れるがな」

母が言った。

「忘れてたんや」

「ほんまに、昼間なんぼでも時間あったのに。ヨツちゃんも気の毒や」

私はランドセルからひしゃげたパンを抜き出した。

「帰りに鮎屋に寄って、お父さんと呼んできて」

私は頷いた。

母は私の嘘に気づいていない。その自然な様子が、私を後ろめたい気持ちにさせた。嘘がばれても、道夫のせいにすれば、自分は良い子でおれる。事実、彼が誘ったことなんだ。家を出て、坂道を上がりながら、そんな事ばかりを考えている自分が嫌になった。

しかし、堂々巡りに同じ事を考えてしまう。

坂の上で振り返ると、屋根は目の位置より下になる。家から赤い明かりが洩れていた。その明かりが、急に私

から離れていく気がした。

嘘をついて危険な場所に行くのは勇気ではない。教師ならそう言うだろう。螢を見たいのなら、もっと、他に方法があったろう。所詮、子供の行ける場所だ。俺が一緒に行ってもやれたのに。父はそう言うかもしれない。

私は、様々な情景を頭に浮かべながら歩いた。

ポツカリ開いた真つ暗な穴で明かりが点滅した。

「やっぱり、やめるわ」

私は穴に向かって言った。

「何でや？」

姿の見えない道夫の声が返ってきた。

「大人に連れてもうたほうがいええ。父さんに頼んでみる」

「ホタルは明日はおらへんかもしれん。雨が降って行けんかもしれん」

「来年でもええ、ちゃんと、言うてからにする」

「今年のホタルは、今年だけや。十日しか生きてへんのだや」

道夫は明かりをつけた。

闇の中に白い少年が浮かび上がった。

「おこられたら、俺のせいにしたらええんや」

「なんで、俺を誘うんや。一人で行ったらええやんか」
明かりが消え、無言が流れた。

そして、道夫が私から離れて行く気配がした。私は道夫の後を追うように闇の穴の中に飛び込んだ。

谷川に沿って歩いている筈だ。道夫が照らし出す径は、そのことさえも、不確かな感覚に導いた。

径の中央が窪み、水が三〇センチ程の丈の細い雑草の茎を浸している。雨水ではない。土中から、少しずつ染みだしている水だ。二人は、草を踏み、そこが径の真ん中だと確かめながら進んだ。村の人々は、この谷の湧き

水を飲んでいた。時々、光に浮かぶ路傍の竹筒はその為の水路だった。

橋を渡った。そこからは、足の踏み入れたことのない場所になる。

音も光もない闇の奥に入っていく。頭上は、雑木の葉に覆われているのか、森と空との境が分からない。

「星も、月も見えへん。明日も雨やなあ」

道夫が言った。

「まだか？」

私は聞いた。谷に入ってから、どのくらいの時間が経っているのだろうか？僅かな気もするし、思いのほか長い気もする。時間を計るものがなにもない。ただ闇が、続いている。私は、時間というものが分からなくなった。生まれて、育って、今の自分、その間にあったものが、抜け落ちていっているような気がした。

「もうすぐや、さつき渡った川にもう一遍出るんや。ほんで、川に下りて行くんや、氣いつけてな」

径は細くなり、急な下りになった。顔に枝や葉があたるのをよけながら、窮屈な姿勢で歩いた。

水の気配がする。川の流れる音が微かに聞こえているようだ。二人は背の高さよりも高い草叢に入った。道はなく、草を両手でかくようにして進んだ。

「見てみ、見てみ、草の中にいる」

道夫が叫んだ。

小さな光が、点々と息づきを繰り返すように点滅していた。

「川に出るぞ」

道夫の声とともに、視界が開け、闇のなかに無数の光の線を引く螢を見た。強く光り、弱く光り、光と光が交差し、また、溶けるように消える。川面に沈む光、川面から舞上がる光。光の線が束になり、光る帯になり、光る闇に変化する。

「生きてるんや、生きてる光や」
道夫が叫んだ。

二人とも光り、細い光路をひき、光る闇の中に吸い込まれていくように思えた。

十二 真夏の死

夏休みに入ると、毎日、ヨッちゃんと兄妹が私を呼びに来た。そして、一日中、山や川で遊んだ。ヨッちゃんにはカブトやクワガタのいる場所をよく知っていた。私は虫捕りに夢中になった。私が運よく捕まえた赤カブトは彼らの羨望の的になった。全体に透明な赤味がかかり、あまり大きくはないが、他のカブト虫にはない美しさを持っていた。

夕方になると、宝石を扱うように籠から出し、縁側で這わせて、眺めるのに飽きることはなかった。

「何処へ行くんや？」

昼飯の後、また集まった四人に、母が畑の中から声をかけた。

「川に行くんや」

私は答えた。

「鮎釣りしたはる人の邪魔すんのちゃうで、これ持っていく」

母は、箆に一杯のトマトを差し上げた。

「素人やのに、うまいことできた」

母は、額の汗をぬぐいながら、嬉しそうに笑った。

「ありがとう」

ヨッちゃんと兄妹が一つずつ箆から取った。

「あんたらには、珍しいないやろけど、おばさんが、初めて上手に作れたんやさかい、我慢して食べてな」

妹の頭を撫でながら母は言った。

「川で冷やして食べよ」
ヨッちゃんが言った。

「流れんように石で囲うて、ここに冷やしとこ」
谷川が川に注いでいる場所をヨッちゃんが指差した。
「あれ塩崎ちがうか？」

石を掴んだ私の頭の上で、のんびりとした口調で修が言った。

私とヨッちゃんは石を握ったまま立ち上がった。

中洲を隔てて、川の中の大きな石の上にいる道夫が見えた。日光が石に当たり、そこだけが日だまりのようになっていた。彼の方からは、川から少し入り込んだこの場所は見えないのだろう。

「何をしとるんやろ？」

ヨッちゃんが言った。

向こう岸の草叢を釣り竿が一本動いている。その竿が彼の背後を通りすぎたのを見計らったように、道夫はシヤツを脱いだ。

「泳ぐんやろか？」

修がまた、おっとりとした口調で言った。

道夫の白い肌が、陽光に抱かれているように見えた。

「わしらも、後で泳ごうや」

ヨッちゃんが、腰を屈めながら言った。

「塩崎も一緒にいれたってもええか？」

不意に出た自分の言葉に、私は、はっとした。

「かまへん」

ヨッちゃんは即座に答えた。

「あれ、塩崎がおらんようになった」

修の言葉に、私は川に目を移した。

道夫の姿が消え、一本の釣り竿が激しく下流に向かって、動いている。川の音に混じって、意味の分からない男の叫び声がした。ヨッちゃんがトマトを投げ出し、走

り出した。

その後を、兄妹が追った。呆然としている私の耳に、男の声が、今度ははつきりと聞こえた。

「子供が流された、……、子供が流された……」

ヨッチャン等の姿を求めて、私は走った。一人でいるのが怖かった。

戸板の前後を二人の男が持ち、ゆっくりと歩いていた。そのそばを三、四人の男女が、歩調を揃えるように歩いた。川を隔てて、私達はその様子を見ていた。戸板に蕙がかかっていた。大人達の動きが、異常なほど、のろく感じられた。

まわりの風景が、小さな木の一本まで、迫って見えるのに、その光景だけが、遠くにあるように思えた。強い日差しの中、小さくぼんやりと動いていた。

急に、妹が、怯えたように泣き出した。

「つれてかえったりや」

ヨッチャンが言った。

無言で兄は、泣きじゃくる妹の手を引いた。家に帰った私は母の胸の中で泣き崩れた。

「もうちょっと早う仲間に」

母は無言で私の頭を撫でていた。

その夜、お通夜は村の寺で行われた。

塩崎さんは機敏に動き回り、時々、やってくる村人と談笑さえしていた。

「庭は蚊が多いし、どうぞ、中へ入っとうくれやす」

一人一人の手をとるように座敷に導いていた。

「正則、塩や」

私は、土間に下り、壺から一掴み塩を握り、引戸を開けて、母の裾に投げた。

「保子は起きへんだか？」

「いっぺん、目覚ましたけど、よし、よし、したら寝てしもた」

裾の塩を払い、母は、そつと髪を手で梳いた。

「村の人は、皆帰ってもろうた。お父さんは、一晚、塩崎さんと付き合う言うたはった。こんな時やから、それも、 shouldn't やろ？」

母は卓袱台の前に座り、私にいうよりも、自分に話しかけるように言った。

布団に入ると、川の音が聞こえた。何日も、聞いていないように思った。知らず、知らずに、意識の外に追いやっていた音が、その夜は、耳のそばで聞こえた。

道夫と話すことが、もう永遠にないのだと思うと、言いたくない淋しさが、私の胸を締めつけた。

私は、体をくの字にして、川の音を聞いた。川の音だけが、苦痛に似た悲しみを和らげてくれるような気がした。

翌日、葬式が終わると、塩崎さんと道夫の遺体は、父の運転する車で町に向うことになった。車は田島さんが用意した旧式の小型トラックだったが、父と塩崎さんは隅々まで水で洗い、黒い幌で荷台を覆った。

村人達は、四、五人ずつ固まり、遠巻きに、喪服の上着を脱いで黙々と作業を続ける二人の様子を眺めていた。顔の知らない村人も沢山いた。こんなに多くの人が村に住んでいたとは私には意外だった。しかし、彼等の気配を私は感じていたのかもしれない。未知な村人の生活が、形のない怯えになった。

一様に黒い服をつけ、異なる種類の人間の動きを、只、傍観しているように思えた。

母と私は、村人達の中にいた。母は私の手を握っていた。

「そんなに汚れとらんのになあ」

田島さんの奥さんの声がした。母の顔を見上げると、声の方向を一瞬睨む母の目があった。

村は土葬であった。塩崎さんは、遺体を町で焼き、近々、遺骨をK市の先祖代々の墓に移すと言っていた。

母は乳母車に乗せた保子に、畑のトマトをもぎ、手に持たせた。保子は不思議そうにトマトを眺め、やがて舐めはじめた。

「やっちゃんのほったも、赤い、赤い」

母は、そう言いながら、保子の脇をくすぐった。保子は乳母車を揺らせて、声をたてて笑った。

夏の日暮れは遅い。柵のそばにいる私に、保子の小さな掌の動きがよく見える程だ。

しかし、一旦暮れ始めると、加速度的に闇の粒子を増やし、刻々とその色を深めていく。

それは陽光の名残を含んだ艶やかな幕をおろすように見える。

土と空の境が不鮮明になり、山は影絵になる。空にあらいた小さな穴のような星が、ぼんやりと光り始める。

「くろうなってきたなあ、家に入るか？」

私の横に、乳母車を押してきた母は言った。

街道を曲がり、二つの影が現れた。

「お父さんや、塩崎さんも一緒や」

私の視線を追った母が言った。

「なにもかも世話になってしもて」

白い箱を胸に抱いた塩崎さんは、柵の外から言った。

「ほんまに、なんていうたら……」
母が口籠った。

「まあ、中に入って下さい」
父が柵を開けて、言った。

「いや、一言お礼言いたかっただけですよって」
何度も父は家に入るように勧めたが、塩崎さんは頑なに柵から入ろうとしなかった。

塩崎さんは、白い箱に何度も何度も頭をくつつけるようにお辞儀を繰り返した。

「あんたらが来はる前、道夫は、いつ来はんのん？、いつ来はんのん？、言うて、やかましいぐらいでしてん」

塩崎さんの視線を、私は、そっと反らした。

「おおきに、ほんにも、ようしてもうて」

塩崎さんは私の頭を撫でると、深々と頭を下げ、踵を返した。

三人は、塩崎さんの姿が街道から消えるまで見送った。彼は、途中、三度振り返り、頭を下げた。そして、曲がり角の少し手前からは振り返ることなく足を速めて一気に消えた。

居間に入ると、父はゴロリと横になった。

「ご苦労さまでした。お風呂わいてます」

父は生返事をして、動こうとしない。

私は、昨日忘れてしまった赤カブトの餌を取り替えようと廊下に出た。

「子供やから、燃えるの早かったわ。あっという間に骨になった」

父の、淡々とした声が聞こえた時、私は、赤いカブト虫を掌にのせていた。

掌に、こそばゆいカブト虫の足の感触があった。指を曲げると、小さな足は、小さな闇を引っ掻くようにもが

いた。

私は裸足で裏庭に下り、赤カブトを葵の葉の上にそつと置いた。いつの間にかカブト虫は闇に溶けた。あれ程に艶やかな赤が、闇の色と同じである事を私は初めて知った。

十三 秋

塩崎さんが落ち葉に埋もれるように道端の斜面を背にして蹲っている。

学校からの帰りの子供達は、彼から出来るだけ距離をとり一列になって前を横切った。気配を感じたのか、塩崎さんは、ふっと目を開けて無表情に子供達を見た。そして、何事もなかったように、再び目を閉じた。

暫く歩いて、ヨッちゃんが私の耳もとで囁くように言った。

「あの人、子供の骨を川に流したんやと」

「ほんまか？」

私も声を潜めて聞き返した。

「とうちゃんが言うのとった。また聞きや言うてたけど」

あの日から一週間程、毎日私は道夫の夢をみた。目が醒めると、夢の内容は跡形もなかったが、夢の中に道夫がいたことは確かだった。夢に導かれ私は四六時中彼の事を考えていたように思う。しかし、日が経つにつれ、彼を思うことが少なくなっていくた。

人の感情の器はそれ程大きくはないのだろう。

日々の些細な感情が、心を埋めつくしていた感情を徐々に希釈し、心の隅に追いやり、やがて、それは小さな瘢痕になる。しかし、消えることはない。人は忘却を装いながら、無数に小さな瘢痕を持って毎日を暮らして行くのかも知れない。私にとって、道夫はどのような体

験の最初であつたように思う。

秋の気配が深まる頃には、時々、昼間から泥酔した塩崎さんを見かける時ぐらいにしか道夫の事を思い出すことはなくなっていた。

そして、ヨッちゃんの話聞いても、気味が悪いとか思わなかった。

「山の色が変わったな」

朝、齒を磨きながら父が言った。

色づく木々だけでなく、山全体の色が変化した。

しかし、季節の変化に、心が騒ぐようなことはなかった。私の目が、村の外のものから内のものへと変化していった。村人にはなれなくても、村人の目を持つことは出来たようだ。一日が終わると、一日を忘れる、所謂、生活が始まっていた。

葵が葉を落とし、初雪が降った。

学校への道で、山の音を聞いた。

地の底から這い上がってくる音は、微かな気配から、やがて、震える轟音になり、正体の見えない音の激しさは私の心までを震撼させた。

「獅子谷が鳴ってる」

ヨッちゃんが言った。

「明日から、大人が順番にわしらを車で送ってくれるんや」

修が言った。

「雪が降った次の日から」

ヨッちゃんが言葉を続けた。

妹は、兄の背中にくつつくように歩いた。

「山鳴りが怖いゆうてたら、都会の子に笑われるで」
ヨッチちゃんが言った。
獅子谷が、また、鳴り始めた。

日の暮れが早くなると、夕食の始まりも早くなった。
母が保子の口に一匙ずつ、粥を運び、父と私は無言で口を動かした。母が保子を寝つかせる頃には、一つの卓袱台で、私は、宿題を始め、父は酒を呑み始める。そして、保子を寝かせた母が、食事を始める。

「塩崎さんが辞めたよ」

父が言った。

母は驚いたふうもなく、

「そうですか」

と、箸を止めずに言った。

何れ、このような事態になるのは誰もが予想していた事だった。

「辞めさせられはったんですか？」

「いいや、自分から辞めた。最低、現場の作業員の給料計算さえしとったら、誰も辞めいうもんはおらへん。わしみたいに、業務報告書を作成して、送ってても、県庁の誰も見んやろ。まあ、見ても報告書の嵩やなあ」

塩崎さんは誰にも別れを告げずに村を出た。彼の辞職が分かったのは、それから一週間程して、若い独身の男が塩崎さんの後任だと役場を訪れた時だと父は言った

「奥さんはいたはったんやろか？」

「さあ、わからへん。あの人について分かっているのは、子供が死んだということだけや」

父は、仰向けになり、天井を睨んだ。

「子供の事だけが原因やない気がするなあ。あの人はずっととあんなんやったんかもしれへん」

父は煙草の煙を天井に吹き上げた。

「せやけど、誰でも、こんなところへ来たらああなるんが普通かもしれない。それに、あの人は辛抱する必要があるのうなってるんやから」

そして、暫くの沈黙の後、父は言った。

「冬やなあ、とうとう閉じ込められた」

十四 冬

家族は正月も村で過ごした。他に身の置処がなかったと言った方が当たっていたかも知れない。

雪と寒さの単調な日々が続いた。

川は、凍るような水を淡々と流し続けた。

保子は頼りない足取りで歩き始め、父は保子を肴に酒を呑んだ。

母は編み物に精を出した。

村の子供達は、手作りのスキーやソリで雪と遊んだが、私には面白い遊びにはならなかった。

家からあまり出なくなり、裏庭の築山をぼんやりと眺めている事が多くなった。時々、南天の実を食べに鶇がやってきた。せわしく木が揺れ、細かい雪を落とし、慌ただしく飛び立って行った。静寂が戻ると、また、何も動くものはなくなった。

道夫なら、冬の村で何をするだろうかと、ふと、思った。彼なら、雪の白に物語を書くだろう。自分の姿が他人に見えない話、途中で消えた話の続きが、軒から思い出したように落ちる雪の雫と重なった。

自分がない世界、永遠に自分という意識の失われた時間、私は、ぼんやりとした不安を抱きながら、思い続けた。

微かな不安を払うように、庭に降り、手で、雪を掘る。今日も、指先に葵の細い根が触れた。

二月にはいると、トンネル工事は一時中止になった。父は役場には行かず、一日一回、現場の見回りに出掛けて行った。

昼過ぎに塩崎さんの後任の若い人が父を迎えに来て、タイヤチェーンを巻いた車で、出掛けた。

私が、学校から帰る頃には、父はラジオを聞きながら酒を呑んでいた。

「毎日が異常なしや、あんなとこ、わざわざ行ってわるさするもんもおらんわ。暇なんもたいがいしんどい」

父が言った。

「田島さんに猟にでも連れてもうたら？」

母が言った。

「誘うてくれはるんやけど、いざ、行くとなると、なんやたいそうになって。それに、町からくるもんと一緒になったら危ないいうて、平日に行かはるし、仕事さぼってるみたいで後ろめたいんや」

「家でお酒呑んでるんもあんまり変わらんと思いますけど」

母は笑いながら言った。

「それも、そうや。とうとう鮎釣りもようせんだし」

父も笑った。

学校から帰ると、家に父の姿はなかった。

「お父さんは？」

と、母に聞いた。

「今日は遅いなあ」

母は柱時計を眺めながら、不安そうな顔をした。

「えらいこっちゃ、トンネルが崩れよった。みんな埋まっつてもた」

引戸を開けると同時に父は言った。

「役場で、県庁に連絡したり、田島さんと一緒にもう一遍現場に行ったり、大変やった。旧道への影響なかったんでほっとしたとこや」

そう言って、父は母が出した水を一気に飲んだ。

「役場で、県からの連絡待つわ。遅うなるかもしれん」

父はそう言って、また、出て行った。

夜遅く父は、意気銷沈して帰ってきた。

「今まで、待ってたんやけど、県からも、府からもなんもいうてこうへん」

疲れた体を沈めるように、重い外套をつけたまま炬燵の前に座りこんだ。

「ほっとけいうことやろか？」

「明日、なんか言うてきますって」

母が父を元気づけるように言った。

保子が父に近づき、覚えたてのお帰りなさいをした。

父の顔が淋しそうに笑った。

十五 螢、再び……。

三月に入っても、父にはなんの指示もなかった。

トンネルは埋もれたまま、工事を再開する気配もなかった。

父は、一日一回の見回りを終えると、役場で、田島さんと将棋をさしたりして、時間を過ごした。

「なまけぐせがついて、県に帰ると、お荷物になるかもしれんなあ」

と、口癖のように言った。

川は雪解けの水を運び、村の景色から、衣を剥ぐように雪が消えていった。

父の職務が解かれたのは、五月半ばのことだった。ト

ンネル工事は無期限中止となり、たった一人の出向は終わりを告げた。

明日、村を出るという前夜、誰にも告げずに、私は、獅子谷に入った。

一家が、田島さんに送別の意味で招待された夜、私は、頭が痛いと言った。そして、一人で川の音を聞いていると、急に、獅子谷に行こうと思いついた。獅子谷に行く為の嘘ではなかったが、結果はそうなってしまった。村を出る日が近づくにつれ、心に広がってくる切羽詰まるような思いが小さな嘘になり、やがて、それは獅子谷に向かって、急に流れだした。

今行かなければ、永遠に道夫を失うような気がした。

私は、只、乱れ飛ぶ螢を目指して歩いた。

後ろを見ないように歩いた。

闇、獣、幽霊、決心を鈍らせるものを頭に浮かべないようにして歩いた。

足元を照らす懐中電灯の光の輪を追いかけるようにして歩いた。

橋を渡る。

やがて径は細くなり、急な下りになる。一年前の光景が、目の前の光景に重なる。川の気配がして、水の音が微かに聞こえてくる。なにもかもが、あの夜と同じだ。

草叢の中で目を凝らした。

しかし、光るものはない。私は、草を両手でかきわけながら、夢中になって進んで行った。

足が滑り、懐中電灯を離れた手が、ひきちぎられた草を数本掴んだ。体はどのような軌跡を描いたのだろう。ただ、闇の中に引きずり込まれて行くという感覚しか私にはなかった。

川際まで滑り落ちた私は、暫く何が起こったのか分
らず啞然としていた。右足の激しい痛みが、私を正氣に
戻した。

深い穴の中に落ちたような気がした。立ち上がろうと
もがいても、どうしようもなかった。

このまま死ぬかもしれない。押し寄せてくる不安に、
気が狂いそうになった。

不安と痛みに、大声をあげようとした私の目の前を、
小さな明かりが一つ、微かな光の線を引き、そして、闇
に溶けるようにふっと消えた。

父は既に定年退職した。

父母は一年に二、三度、大阪の私の家を訪れ、一週間
程滞在する。その間、孫と遊ぶのが唯一の楽しみだと言
った。

村の話が出ることは少ない。たまに話題になっても、
私の怪我の事に終始する。なんで、あんなところに行った
んやという父母の問いかけと、古いことやから忘れてし
もうたという私の答で、何時も終止符が打たれる。私、
保子の結婚、孫の誕生、父の定年、様々な家族の出来事
の中で、村での生活は次第に幅を狭めていった。

トンネルは随分前に開通していた。

京都から二時間足らずで村に行くことが出来る。

行ってみようかと、ふと思う事もあるが、あの時以来、
私は村を訪れたことはない。

平成二十一年七月二十一日（火） 了